

## ウズベキスタン(UM)旅行記

JA3IVU 北井 十生

今年の8月19日から8月26日まで、今年独立20周年を迎えるウズベキスタンに行ってきました。

今回は、成田発で集合が8時だったので前日に伊丹から成田へ飛び、成田で一泊しました。

荷物を持って家から伊丹までと成田の第1ターミナルからウズベキスタン航空の第2ターミナルまでの移動すること考えて8月16日に宅配便で成田第1ターミナルまで送りました。これで移動が楽になりました。

8月18日 12時に家を出て、天王寺から空港バスで伊丹へ、JALで成田へ、着いたら16時00分、一緒に行く人達と成田の第2ターミナルで前夜祭を行い、送迎バスでホテルへ。朝7時30分発の送迎バスで第一ターミナルへ。宅配所で荷物を受け取り8時に集合場所へ、今回は2名のツアー。チケットをもらいウズベキスタン航空のカウンターへすぐにチェックインができた。

HY528便(NRT-TKS)で席は主翼の上で下は見えない。乗ってすぐ飲み物のサービスが始まる。まだ水平飛行になっていないのにだいじょうぶ?? 飛行機 B767では乗客はほとんどが日本人の団体。タシケント経由でイタリアに行くツアーとサンクトペテロブルグへ行くツアーと私たち。成田-小松-島根半島 韓国-北京-へてタシケント国際空港に16時40分ころ無事到着した。この空港 こじんまりしていて他国の航空会社の飛行機がない。タシケントで降りる人とトランジットで他国に行く人とバスが違ふ。それにバスの行き先表示が「タシケント」と「トランジット」のスペルがよく似ているので間違えやすい。実際に間違える人もいるとのこと。乗客のほとんどが「トランジット」バスへ、「タシケント」行きは私たちだけだった(25人)入国審査を経て 荷物を受け取りまず夕食のレストランへ それから 市内中心部にあるホテルへ。

8月20日朝、ホテルの窓から見るとこの場所はタシケントの中心部らしい。まず、パステイ・イマム広場へ、ここには「バラク・ハーンメドレセ」「ジュマモスク」「カファル・シャーン廟」などがあり、再建されたようで比較的新しい。次ぎに「クカルダシュメドレセ」という神学校でソ連時代は倉庫に使われていたらしい。そのとなりに「チョルスバザール」という市場 まあいろいろなもの売られている。香辛料、チーズ、野菜、米まで。土曜日の午前中なのでまだ空いていたが午後からは混むらしい。この街には中央アジアで唯一「地下鉄」が走っているのを見て見た。車両は旧ソ連製で構内はきれいな飾りがたくさん。モスクワの地下鉄ほど深くないがそれにしてもエスカレータのスピードが速すぎる。

地下鉄を降り「独立広場」へ。ここには「母子像」と地球儀の建物が かつてはここに「レーニン像」があったらしい。「ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場」へ。ここは第二次世界大戦後にソ連によって抑留されていた「旧日本軍」の捕虜達によって戦後に作られた。横の壁面には強制移送された日本人によって建設に参加し、貢献したと日本語で書かれています。

1966年の大地震でもでもビクともしなかったと言われている。

郊外に戦後ソ連の捕虜となり亡くなった日本人の墓地があります。今でも、地元の方がお世話されており、きれいな花が供えられていました。

また、タシケント空港からウルゲンチ空港まで国内線での移動です。この飛行機 小さいが高翼で4発のジェットエンジン。機内は狭く最後部の座席だったので足が入りにくい。足の長い外人はどうやって座るのか???

もちろん、ボーディングブリッジなるものはなく、全て徒歩で階段式(タラップ)。離陸すると暗くなり灯りも見えないことからおそらく砂漠の上を飛んでいるのでしょう。1時間半ほどでウルゲンチ空港へ。ここもタラップで降り、空港ビルまで徒歩。しばらくするとトラックが荷物を運んできた。ターンテーブルが回ってやっと荷物を手にして、バスまでゴロゴロと引っ張って歩く。バスにエアコンがない。いくら夜でも車内は暑い。40分ほど走り、ヒヴァのホテルに21時ころ着いた。これから夕食を済ませ部屋へ。

ヒヴァは16世紀の「ヒヴァ・ハーン」の時代にホラズム王国の首都として栄えた街。

朝食後、出発までに時間があつたのでホテルの周辺を散歩。仔牛に道ばたの草を食べさせながらのんびり、城壁の中に入ってみた。住んでいる人がいる。

城壁の「西門」から世界文化遺産「インチャ・カラ」に入る。すぐに「カルタ・ミール」という大きなミレットが完成すれば109mになったと言われているが28mの高さで中断されている。

この中には、モスク、メドレセ、ミレットがたくさんあり、最初はガイドさんの説明をフムフムと聞いていたがそのうちどれがどのモスクかメドレセかわからなくなってきた。

数学者で0(ゼロ)を発見した「ムハンマド・アル・ホレズミ」はこの街の生まれで像もあった。

数あるミレットのうち、「イスラム・ホジャ・ミレット」へ登った。真っ暗らで狭まいらせん状の階段で「関ハム」で買ったLEDライトが役に立った。

上からヒヴァの街が一望できる。気持ちいい風が吹く。



世界文化遺産 ヒヴァ 「インチャ・カラ」

ウルゲンチ空港からブハラ空港まで約1時間の飛行。夜おそくホテルに入った。どうやらここも街の中心部のように前に市役所がある。

ブハラは「サーマン朝」の首都として始まり、チンギスハンによって荒らされますがその後「ティムール帝国」の重要な都市として栄えた。この街もたくさんの「モスク、メドレセ、ミレット」があり、また、頭の中が混乱してきた。

「アルク城」はロシア革命前までは歴代ブハラ・ハン国の統治者が住んだところである。建物そのものは18世紀に修復を繰り返して建てられたものである。この入り口部分は監獄であり、多くの囚人が処刑されたという人形で当時の様子を伝えている。

「イスマイル・サーマーニ廟」は中央アジア最古のイスラム建築で9世紀に建てられた。

「サディール・ディヴァンベギ・メドレセ」で夕食をしながら「八頭身」の美女が民族舞踏ショウとファッションショウを見る。

このころから暑さ(40℃)と疲れとで観光途中からホテルへ帰る人が何人か出た。私はなんとか持ちこたえたが「ヒブアのミナレット」登りで筋肉痛になり、必死でみなさんの後に続いた。

次は「バス」で約7時間の移動です。「シャフリサブス」を経由して今回の旅のメインである「サマルカンド」へ。

「シャフリサブス」はウズベキスタンでは英雄とされる「ティムール」の生誕の地です。もちろんここも世界遺産です。

また、ここにも「モスク」がありますが建物はかなり壊れておりこれから修復されるとのこと。

この日初めて、ウズベキスタンの郊外の道路を走りました。一応道路は舗装されているが穴ボコがたくさんあり、高速では走れない。距離の割に時間がかかる。

夕方、やっと青の都 世界遺産の街「サマルカンド」に着いた。やはり「都会」だ。車が多い。それも信号は守るが走り方はとてもとても怖くて見られない。

13世紀に「チンギス・ハーン」によって破壊された街を14世紀に「ティムール」が新しい都を築き、シルクロードの中心的な都市として栄えた。

中国の陶磁器の技術とペルシアの顔料が結びつき、色鮮やかなタイルができた。

今回の旅のメインの観光場所「サマルカンド」に来たというのにレギスタン広場が2年に1回、8/25から開催される「サマルカンド国際音楽祭」の会場として準備中のため入れないという情報が入った。

参加者一同「エー、ここが見たく来ているのに」の声。

日本の旅行社と現地の旅行社が交渉を開始した。しばらくすると入れるかも知れないとの情報が入り、昼食時間を後に回し、レギスタン広場へ。行くと多くの観光客が開門を待っている。警備員に荷物検査と身分証明書(パスポート)をチェックされてなんとか広場に入ることができた。

この広場には3つのメドレセがコの字型に並んでいる。音楽祭用の舞台、客席、照明機器が設置のされているためこの3つがきれいに見えない。

国旗が20本ほど掲揚されており、日章旗もあった。さすがに「青の都「サマルカンド」」の中心部といっただけとてもきれいだ。

いよいよ帰国する日となり、サマルカンドからタシケントまでは鉄道の旅となった。サマルカント駅に着くと空港と同じで荷物検査と身分証明書(パスポート)をチェックされた。

X線で見ると変な電線が写ったらしく中を開けると言われ、これはデジカメの充電器、ビデオの充電器と説明。

世界文化遺産 サマルカンド レギスタン広場 「シェルドル・メドレセ」  
8/25から開催される「サマルカンド国際音楽祭」の会場 準備中



「サマルカンド国際音楽祭」に出演する人達を歓迎する女性たち

するとGPSを目が行き、これは何だとの質問「GPS」と答えると無事に通してくれた。

無線機類を持っていかなくてよかった。

駅の構内には乗客以外は入れない。改札口付近に民族衣装を着た女性が並んでいる。何があるのかと聞いたら

「サマルカンド国際音楽祭」に出演する人達を歓迎するためと。その中に日本語のプラカードを持っている女性がいたので聞いてみた。日本から来られる出演者を迎えるため歓迎の言葉を日本語で書いたメモを持っていた。

また、大統領も来られるとのこと。厳重な警備体制をしいていた。その割には自由に撮影ができた。

# China Ham 2011を訪ねて

JA3USA 島本 正敬

以前から行って見たかった中国のハムフェア China Ham 2011が東京ハムフェアの翌週末9月2~4日に上海で行われると聞き、早速旅行の準備を始めました。仕事で度々中国に行くことがありましたが、20年余り前のこと。その後急速な発展を遂げた中国の経済の中心地である上海には行ったことがありませんでしたから、未知の国へ向かうときのような楽しみ感じながらの旅支度。中国と日本との往来がかなり増加していることは知っていたものの、これほどの便が、それも中国各地への直行便があることにとっても驚かされました。

参加のための事前登録のWebがあると知りさっそく検索してみると、事前登録だけではなくホテルの予約もそこからできるよう、早速参加登録とホテルの予約を行いました。いくつかのホテルがリストアップされていましたが、会場に最も近いコメントされたSheraton Shanghai Hongqiao (中国名は虹橋喜来登上海太平洋大飯店)を選択すると、間もなく上海の旅行社からメールが入り、数回のメールのやり取りで予約は完了。フェアが金・土・日の3日間とのことなので、前日の木曜日夕方のJALで向かい、日曜夕方の便で帰ることになりました。

上海には虹橋と浦東という2つの空港がありますが、関空からのJAL便は浦東空港へ向かいます。浦東空港は新しく始どの上海発着の国際線はここを利用しているようで、上海市内とはリニアモーターカーで結ばれています。着陸からゲートまで広々とした空港を延々と走り到着したゲートは入国審査場からもっとも遠い場所でした。動く歩道の上を速足でやっとの思いで遠い距離を移動して入国管理ゲートへ着くと、JAL便からの一番乗りであったせいか、待つこともなくスムーズに入国審査と通関を通過。リニアモーターカー体験がこの旅の楽しみのひとつでしたから、早速、第1と第2ターミナルの中間位置にあるリニアモーターカーの駅に向かいました。

リニアモーターカーの路線は、上海地下鉄2号線のLongyang駅と空港を結ぶだけで途中停車する駅はありません。料金は片道500元ですが、上海までの搭乗券を見れば400元になります。事前に上海通の人から聞いていた情報が役に立ちました。この路線の正式名は上海磁浮交通(英文名: Shanghai Maglev Transportation)で、街で見かける標識等にはMaglevと書かれ、リニアの文字は全く見かけませんでした。ビジネスクラスという上等席を連結した車両もあるようですが、普通席でもきれいで、ゆったりしています。ドアが閉まり車両が少し浮上したような気がすると、普通の電車のような感じで走行をはじめました。レールからのガタゴトがないことくらいが大きな違いです。車窓の流れる景色を見ていると、ある速度から急に不安に感じ始めたので車内に設置された速度表示に目をやると、時速300km余りを指していました。どうやら景色の流れが新幹線で見慣れた速度を超えたからだったようです。表示速度はその後も上昇を続け410kmまで達すると一定速度となりました。離陸のために滑走している飛行機がいつまで経っても離陸しないように感じました。その速度に、同乗していたフランス人のグループが速度計表示の写真を撮ったりして大騒ぎです。8分間という短距離の運行ですが、旅行者にとって便利であるだけでなく、海外からの訪問者が最初に経験する場所ですから国威掲揚にもずいぶん役立っているようです。日本にもリニアモーターカーの実験路線があるようですが、なぜ成田・東京間に実験路線を作っておかなかったのかと考へたりしていると、たった8分のリニアモーターカー初体験は終了。

そこからホテルへはタクシーで向かいましたが、車窓から見た上海市内の発展ぶりに目を見張ります。仕事で中国のエリートと接する機会が多くあり、年々急速に近代化していく様子を彼らからも感じていましたが、それでも上海市内の景色は驚きです。知らない国を訪れた時、ビル等の工事現場の様子からその国の発展レベルを推し量ることがあるのですが、それ



から見ても中国の経済発展は単に規模だけでなく、かなりの水準に到達していると感じました。

ホテルに到着してチェックインを済ませると、早速フェアの会場までのルートを確認するため外に出ました。ホテルへのタクシーの窓からチラッと見えたフェア会場らしい建物の方向に歩きだすと、看板や参加登録の窓口のサインから、滞在ホテルの隣がフェア会場であることがすぐに判りました。

China Ham 2011の初日9月2日の朝は10時の開場されるといので、それに合わせて会場に向かいました。入口にある登録の窓口では多くの人が登録用紙に記入したり、受付の列に並んでいたのですが、Webで登録した人のための受付窓口があり、そこには行列はありません。Webの申し込みページからプリントした用紙を渡すと、即座にパスをくれました。そのパスにはバーコードが印刷されていて、入口で係員がバーコードをスキャン。これなら参加者数をはっきりと把握できるはずでした。

China Ham 2011はラジコン模型のショーと併設されています。というより、ラジコン模型ショーの一部をハムのために利用しているというのが正確な表現です。東京ハムフェアの会場より少し狭いホールの1階と階を使用していて、全体としてはとても広いのですが、ハムのために使用されているのは2階の1/4か1/5程度です。ハムのエリアに入って先ず目に飛び込んできたのがダイヤモンドアンテナのブースでした。その近くにはコメット、アルインコ、続いてアイコム、パーテックス、ケンウッド。日本のメーカーばかり...と一瞬思ってしまった。

しかし、いずれも日本から各メーカーが参加しているのではなく、中国での輸入代理店が開いているブースです。少し歩きだすと、中国ブランドのブースが並んでいるのを見つけ何かホッとしたのは、ここまで来て東京ハムフェアと同じもの？という失望のようなものが吹き飛んだからでしょう。VHF・UHFのFMハンドヘルド・トランシーバのメーカーが数社。既に米国のハム業界でかなりのシェアを持っている見覚えのあるハム用機器だけではなく、業務用のFMハンディも展示をしています。

GREという米国のQSTやCQで広告を見かける会社がハンディ高帯域受信機をPCで制御して展示しているのを見つけ、展示されている機器について英語で質問をしてみました。どこから来たか尋ねられたので日本だと答えと、「日本語でいいですか?」! 日本では聞いた記憶の無いブランドなのに、日本の企業でブースのスタッフもみんな日本人。この会場で見つけた唯一の日本企業ブースでした。米国のRadio Shack向けOEM受信機を日本で製造しているそうで、自社ブランドでも米国で販売を始めたか。また、米国でアルインコ製の



品の代理店をしていると聞いて、GREのロゴがなぜ見覚えがあるのか判明しました。彼らと僕の共通の知り合いが米国でいることも判り、このブースで長居をしてしまいました。



注目したのはCPU制御で作動する機器を並べているブース。その展示品のひとつは、市場にある殆どのアンテナローテーターを制御可能なコントローラです。回転部モーターに必要な電源がAC、DCのいずれでも、方位表示の信号が抵抗器 (POT) でもパルス信号のいずれにでも対応するのです。もちろんPCからの外部制御も可能です。その上、方位と仰角の2種のローテーターを同時に制御できますから、衛星通信ソフトウェアを利用して衛星の自動追尾も容易に行えるのです。また、スロバキアのMicro Hamの製品のようにPCと無線機間のインターフェイスもありました。これを使えばソフトウェアによる無線機の制御や、ソフトウェアによるRTTYやログ等と無線機のリンクも行え、またエレキやボイスメモリーも内蔵しています。その他、日本製では見かけないCPU制御の周辺機器数種のデモも行われていました。これらは商品として準備されているようですが、未だ本格的な販売は始っていないようです。OM-2500Aというスロバキア製の2KWのオートチューンのリアアンプがありますが、全く瓜二つのアンプが別のブースで展示されていました。このアンプの写真を撮り忘れたのですが、OM-2500Aとモデル名が異なるだけで、外観は全く同じ。OM-2500Aはロシア製の真空管を使用していますが、展示されていたアンプは中国製を使用しているようです。全くのコピーに見えたので、ライセンス生産か単なるコピーか尋ねたら、ためらいもなくコピーだと返事が返ってきました。生産を始めてまだ少量しか販売していないとのことでしたが、内部もきれいな作りでしたので、そのうちコピーでない独自のものも始めるような予感がしました。

28MHzが中国と開けると聞こえてくるCBのような多数のFMの信号があります。これに利用されていると思われる28MHz FM専用の車載用トランシーバが4000円程度で販売されていました。同じブースに24MHzと28MHzのオールモード機を見つけましたが、未だ展示だけで価格も未設定とのことでした。近々、安価なHF機も中国から供給されるようになるかもしれません。

会場訪問者のほとんどは中国の人達ですが、多くの方はVHFやUHFだけを運用しているようでHFのハムは少ないという印象を受けました。外国人参加者のほとんどは日本人で、日本からショー目的で来た人だけでなく、仕事で中国で駐在している日本人ハムも多数見かけました。また、中国語のできる日本人ハムが多くいたように思えたのは、ちょっとした驚きでした。長い間会っていないJAのハムと出会ったり APD XC 2008に中国から参加してくれたカップルも北京から来ていて偶然お会いすることもできました。

中国のハム関連機器が、滑走をしていた飛行機がまさに離陸しようとしているという時期だと、China Ham 2011を訪れて感じました。日本のハムほど歴史が長いだけに、日本とは全く異なる視点から中国のハムやハム関連商品の歴史が始まっているような気がしました。上海の発展ぶりや人々を目にして、日本が中国に追い越されるのはGDPだけでなく、いろいろなことが起こるのだろうと感じながら上海から帰途につききました。

